

復興まちづくりから生まれるコミュニティースペースの創造

阪神淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション
(兵庫県神戸市)



集会所の建設予定地

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

御蔵通5・6・7丁目地区は、阪神・淡路大震災以前は幅の狭い路地を挟んで木造長屋が建ち並んでいた。長屋は格子が室内と室外の淡い移ろいを伝え、瓦が葺かれた屋根は、重厚で変化に富んだ家並みを造っていた。辻々の祠の中にはお地蔵さんがあり、夏の風物詩として地蔵盆では子供達の楽しい行事として営まれた。また植木の水撒きや井戸端会議の中心であった井戸、路地を飾っていた植裁と路地は日常を映し出していた。地域は歴史も古く御蔵遺跡をはじめ幅広い年代の遺跡（弥生・古墳・奈良・平安・中世）が出土している。

1995年の阪神・淡路大震災で80%が全焼し大きな被害を受け、区画整理事業が施工された。道路は、6mに拡幅され、空き地も多く残っている。建設される住宅の大半は、工業製品として流通している無機的な材料で造られている。個々の住宅はデザインされているが、均質で住宅展示場のような冷たい感じのする町並みを造っている。

1-2. 目的

2001年の夏ごろ、復興区画整理事業の担当部局である神戸市都市計画局より、「土地を提供するので集会所建設の補助金制度を活用して地域の集会所を作つてみないか」という呼びかけが御蔵通5・6丁目町づくり協議会（以下まち協）にあった。地域内の人人が寄り合えて、学習、読書、語らい、趣味を生かした交流の場を建設するため、まちの住民が集まって話し合っている。本当に必要な集会所となるように集会所の必要性や、集会所を利用した活動内容の検討も行っている。さらに、実際の集会所の利用方法や、建て方について先行事例を見学する事で確認を行っている。見学先でも見られた利用されていない施設は、暖かさを感じないと住民は言っている。それは資産としても無駄になる。地域で行っている検討委員会では“木のぬくもり”“暖かみのある場”になるような集会所の建設を目指そうとまとまった。“集会所に古民家移築を”と提案があり古民家を探しあて木のぬくもりがあり暖かみのある集会所にするべく、様々な活動を通して集会所の建設を進める。民家の魅力に加え、集会所のプランや利用方法、建設工事に関わることで親しみが生まれる。集会所が建設された時には新しい街の拠点となり、日常

的に住民がくつろげる場として育まれる。場が育まれれば、人が育まれ街に魅力と活気が生まれてくる。新しい街の展開が起こり、さらなるまちづくりが行われる。防犯活動、防災活動、福祉活動など地域がつながりコミュニケーションが生まれる。

多くの活動の拠点となる為に建設のプロセスを開くことで参加意識が出来る。その建設プロセスを築き、開けた施設になることを目的とする。

II. 活動の内容

2-1. 魅力ある施設の創造

集会所の建設に向けて進める中で、検討する委員会（御蔵通5・6・7丁目建設委員会）を1ヶ月に2回、地域周辺の施設を使って実施している。御蔵通5・6・7丁目には集会所がないが、周辺地域には数多くある。その為に、他地域との区別や利用方法を参考にして新しい施設造りを考えてきた。

(1) 建設委員会の開催と地域内施設の使い方と問題点。

(2) 集会所の使い方を考える。

(3) 他地域の自治会館の見学。

（東灘区：清流会館、御旅会館、北区：八多町地域ふれあいセンター）

(4) 見学会で見た施設を振り返る。

御旅会館、清流会館は鉄骨造の建物で、清流会館は地域内からボランティアを募り毎日誰かが常駐し毎日の運営を管理していた。八多町地域ふれあいセンターは一部に地域の茅葺き民家を移築した和室を持っていた。その他に、ホール、児童館などを持った複合施設でスケジュールボードを見ると、ぎっしりと予定が書き込まれ、地域の中心になっていることを実感させた。そして、古民家が集会所として再生されている事に驚き、民家がもつ人を引き寄せる魅力が地域の中心を形作っていることに関心を持った。意見を集約し民家移築を進めていく。

2-2. ハードとソフトの両立

民家移築で集会所を建設することを約束し、建設委員会を進めて行く中でいろいろな方々の協力を得て、香住町安木にある築120年の民家を探し出すことが出来た。これは、北前船を出していた村の船員の家で大きさも30坪程度と集会所とするにはちょうどいいものだった。

住民と支援者を含め総勢60名でバス一台を仕立てて民家の見学会を実施した。その途中には、民家を再生して博物館にしたものやモデルルームになっているものがあり、民家に手を入れることでかわる様を見て貰いながら解体し移築する民家の見学を行った。120年の間風雪に耐え忍んできた建物は、一見すると廃屋にしか見えなかった。しかし、建設委員会などを通して



検討委員会の様子

培ってきたものを駆使すれば新しく生まれ変わる様を創造し見ることが出来た。地域としては、前の主の方に「移築されても、神戸の御蔵に来れば思いの詰まった家と再会できます」と伝えている。また、典型的な民家型の平面でもあるために、文化を残す意味でもそのままの再現を原則とした。平面を変えずに集会所とするためにはどうすればいいのかと、集会所の使い方、部屋の大きさなど何度も話し合った。建設工事が進む中でもワークショップやアンケートを実施し、集会所の使い方を常に考えた。

2-3. 解体工事や建設工事の役割

解体工事には、大阪にある建築を学ぶ専門学校の学生や神戸の学校の学生に建設ボランティアとして参加を呼びかけ約60名の学生が集まった。香住町の体育館を借りて、泊まり込みで二週間解体工事を行った。建築を志す学生にとっては実際に建物にふれる機会であった。屋根瓦の撤去に始まり野地板、垂木、母屋と順番にはずしていく作業を解体工事の指揮をしてくれる大工の元で実施した。村の道路は狭く、民家には軽トラックが入るのがやっとであった為に材料を運ぶのは人海戦術で行った。建物を造っている材料の質感、質量に触れ日頃味わうことのない充実感を得た。香住町安木村の最後には、地域間交流としてふれあいコンサートを実施し長田名物のそば飯をふるまった。

解体後も、建設に向けて土壁の下地となる竹の伐採、土壁の中に入れる藁の確保、解体した民家から運んできた壁の土造り、民家部分以外に水回り部分を建て増しするためにその部分の木材伐採などを行った。

III. 活動の効果と今後の課題

3-1. 効果

地域で実施している勉強会では“木のぬくもり”“暖かみのある場”になるような集会所の建設を目指そうと話し合い、“集会所に民家移築を”と決まった。香住町安木村は北前船を出していた村であり、寄港地の最後が神戸と言う事もあり文化的な繋がりも感じられる。その古民家を住民が参加し解体、建設作業にも立ち会うことでより親しみが沸き気軽に立ち寄れる施設の建設が可能になる。また、民家移築の集会所が建設されることで年齢に制限がなく子供から老人までの異世代交流が出来る場となる。老人には昔懐かしい場になり囲炉裏を囲んで昔話に花が咲く。また、調度品（和箪笥、船箪笥、大八車、提灯、かまどなど）も一緒に頂けるので、子供には昔の日本文化に触れる身近な教材になる。異世代交流の場になり文化伝承の場になる。日常的に利用されない施設は資産としても無駄が多く折角造ったのに利用されないものとなる。そこで、常日頃人が出入りできる場所とする様に住民が共に考える機会をつくる。キッチン



瓦おろし解体作業



軸組み解体



土壁解体

の見学会や部屋の利用方法を考えることで、集会所で出来ることを考え何が必要かと思いを巡らすことが出来る。

解体工事は、大阪にある建築を学ぶ専門学校の学生や神戸の学校の学生に建設ボランティアとして参加を呼びかけた。建築を志す学生にとっては実際に建物にふれる機会である。実際に建っていたものを解体し、昔の大工が作り上げた痕跡を解読しながらの作業に手の技を肌で感じることが出来る。建物を把握する意味でも充実したものになり学びの場にもなる。また、学生が関わることで他の場所で解体工事や建設工事を語り、より多くの人が御蔵の集会所を知ることになる。外からの目は、地域住民を元気付け励ましてくれる。地域に学生が足を運ぶことで若者の建物に対する思いが地域に波及し、自信を持つことができる。また、住民と外部からの支援ボランティアがこの集会所建設に「もの（現物支給）」「かね（資金援助）」「ひと（労働力提供）」の援助をすることで、いつの時代にも通用する人が豊かになるための新しい住民参加まちづくりの確立を目指している。

解体工事後の建設工事準備としては、昔ながらの建て方を行うために土壁の下地となる竹の伐採、土壁の中に入れる藁の確保、解体した民家から運んできた壁の土造り、民家部分以外に水回り部分を建て増しする。その部分の木材伐採などを通して、家が出来るプロセスを住民、建設ボランティアと共有することでそれぞれの手が加わった痕跡から建物に愛着を持ち、ちょっとしたことだと自らが補修し手入れをすることが出来る。手が入ることでいつまでも集会所として維持され、柱の傷や壁の出来を批評しながら輪になって集まることが出来る。

今後のまちづくり活動においてふれあい喫茶、ミニディなど地域の中で地域が支える活動の拠点が出来、復興まちづくりがこの施設と共に歩んでいくことになる。

3-2. 今後の課題

この工事の施工者は、集会所の建設だけを受け持つのではなく、住民や建設ボランティアの参加を理解し協力体制をつくって行かなければならない。工事期間中の問題も含めて積極的に対応していただけすることが最優先とされるので金額もさることながら難しい選択である。

抱える問題がもう一つある。運転資金の調達である。事業費としては、復興基金からの補助金が最高3,000万円と御蔵通り5・6・7丁目まちづくり協議会が持つ800万円を加え3,800万円と考えている。3,000万円の補助金は、建設工事が竣工し実績報告書を提出してから二ヶ月後となる。施工工事期間中に支払われる前払い金、中間金を支払うことが出来ない。施工工事会社の負担を強いるとても施工者は金利を払うことになる。金利は安くとも、百数十万円からのお金を支払わなければならず、



竹取り



土作り

余力のある工務店にお願いするか地域で資金を造り運転させていくことしか考えにくい。何とか、地域で資金を造り運転していいのかと模索を行っている。

建設が進められ集会所として形が現れる時には、集会所を運営し活動していくソフトの構築が必要になる。意識と活動を継続し、担い手を育んでいくことも大切なことである。



民家模型作り



解体工事に参加した学生とともに

3-3. さいごに

2003年4月2日、神戸市都市計画局と土地の賃貸契約が締結された。建設用地は、通常の建設用地よりも大きなものである。民家は、土壁の外側が杉板で覆われ、軒裏も化粧で垂木に野地板が現れていた。この地域で建設しようとすると隣地境界からの距離が短くなると防火的に建てることが出来なくなる。その為に、広い土地を提供して欲しいと要望していた。最初に提案された敷地は、隣地境界から建物までの距離は法的に必要な5.0mを確保していた。行政より一時は提案された敷地であったが、公平性という理由から面積を減らすことが出来ないかと打診があった。民家は香住で建っていた時の姿をそのまま再現しようと計画していた。香住町の文化と生活までをできるだけ継承し、地域の子ども達と民家が生きてきた生活を実感したいと考える。敷地が小さくなると隣地境界からの距離は3.0mとなり、元の姿では建設が出来なくなる。地域としては前の持ち主の方に、「思いの詰まった家が神戸の御蔵に来れば再会できる」と伝えていたこともあるってどうしても譲れなかった。地域の女性達も、まちづくり活動や集会所の運営方法など想いを伝えるため、行政担当者に度々足を運んだことも大きな力となって4月2日を迎えることが出来た。土地の契約が結ばれたことで集会所の建設が前に進んでいくことが出来る。4月3日には土地区画整理法76条申請書、福祉のまちづくり条例、埋蔵文化財届出書、建築確認申請書などを提出し、今は審査中である。また、工事施工者の選定を含め工事金額の調整を行っている。申請手続きに工事金額が決定されれば、安心コミュニティー設置補助の申請がある。補助金交付決定通知があった段階から工事着工が出来る。

土地の件などは、地域の活動が評価され思いが伝わった証である。この住民の思いを意識し建設ボランティアなどの参加に理解があり、集会所の建設だけでなく地域を育んでいく一助を行ってくれる施工者を決め、住民に愛される集会所が建設されることを期待し、生まれた集会所でより一層御蔵通5・6・7丁目のまちが育まれることを望んでいる。

＜団体活動データ＞

■阪神・淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション

活動テーマ	復興まちづくりから生まれるコミュニティスペースの創造
活動目的	阪神・淡路大震災後の復興まちづくりの経験を活かし、日本各地でのヒューマン・スケールのまちづくりを支援することにより、もって市民の生活の質の向上およびサステナブル・コミュニティの建設に資することを目的とする。
設立年月	1996年4月
代表者名	宮定章
活動地域	神戸市長田区
メンバー	17名 団体職員、学生、会社経営者等

●団体設立の経緯

阪神・淡路大震災の際、震災ボランティアとしてグループに所属して活動していたメンバーの一人が震災で全焼し、区画整理の指定を受けた御蔵通5・6丁目町づくり協議会の役員会に出席したことをきっかけに、まちづくり市民活動を支援する目的で、地元の会社経営者とともに立ち上げた。

● 活動地域図（活動位置図）

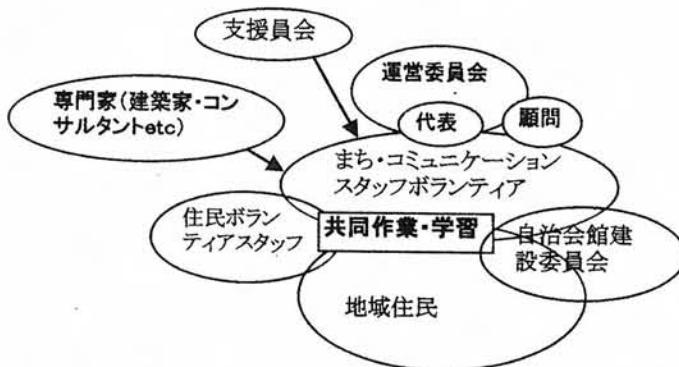


(まち・コミュニケーションホームページより)

●これまでの活動

同地区はもともと古い長屋が軒を並べる下町であったが、震災で壊滅的な被害を受け、8割以上の家屋が焼失した。その後、区画整理が行われたが、避難所や仮設住宅に入った人で戻ったのは約3分の1で、地区の住宅再建はほぼ半分にとどまっている。いまだ多くの空き地が残っており、その地域の再生に向けた活動、支援を行っている。

- ・1995年阪神淡路大震災発生。区画整理地域に指定され事業開始。
- ・まちづくり協議会の支援としてまちに関与する。
- ・共同化住宅「みくら5」のコーディネイト役を担う。
- ・現在もまちづくり支援としてイベントの支援（慰靈祭・盆踊り・餅つき・月見の会など）
- ・自治会館の建設準備会の支援活動



1996年1月	御蔵地区震災犠牲者慰靈法要開催（現在に至るまで毎年開催）
1996年4月	阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション設立 共同再建住宅コーディネート開始
1996年8月	河内音頭夏祭り開催（現在もつづく）
1997年8月	第1回御蔵学校＜地域で学ぶ勉強会＞開催（現在に至るまで、年2回開催）
2000年1月	共同再建住宅＜みくら5＞竣工式
2000年3月	地域住民と共に台湾被災地訪問（以後2回訪問）
2001年5月	震災勉強を希望する修学旅行生の受入開始
2001年9月	台湾被災地支援チャリティーコンサート「ひまわりコンサート」開催
2003年1月	写真展「震災から8年いま・むかし～まちの写真展～」開催 第7回防災まちづくり大賞（総務省）総務大臣賞受賞

●助成対象活動

神戸市から土地の提供を受け、集会所を建設しないかという話が御蔵通5・6丁目町づくり協議会にあり、協議会内に建設委員会が発足。集会所のあり方について検討したり、他地域の事例をみた結果、兵庫県城崎群香住町安木の古民家を移築して集会所として再利用することになる。今回は古民家の解体と集会所建設工事のため、土づくりや木材の準備などを行った。

2002年6月 古民家見学会、調査

8月 古民家の解体工事

9月 解体材の運搬

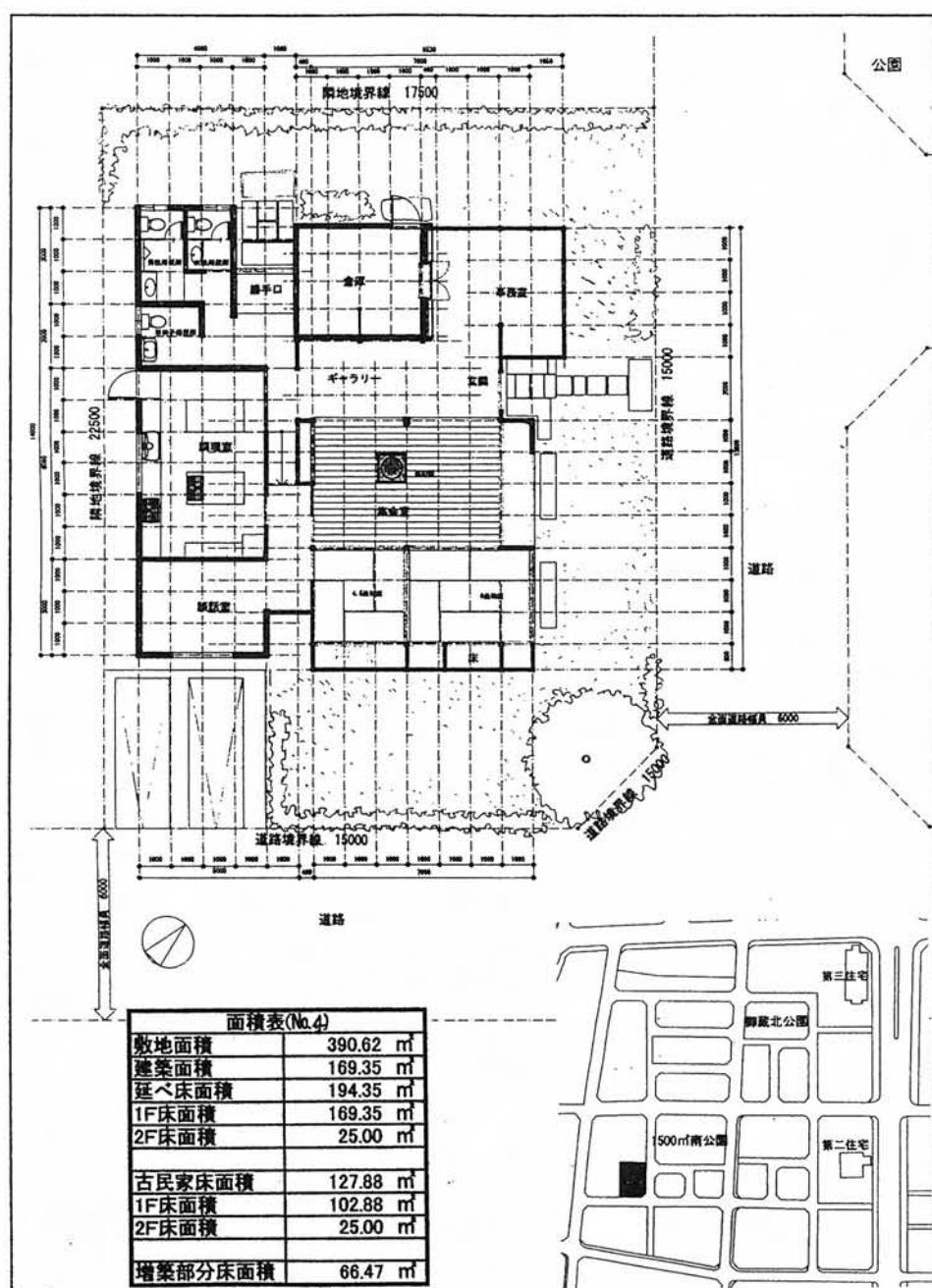
10月 竹、藁取り、土壁の土造り

11月 土壁の土造り、木材伐採

12月 木材の製材

(集会所平面図及びその位置)

- ・場所は御蔵通6丁目に計画している公園の西側
- 古民家を移築・再生した建物を中心に、厨房施設やトイレなどを追加



●これからの予定

建設に向けて、神戸市と土地賃貸借契約の締結、必要な申請書類の提出、工務店の選定などがある。補助金が出るのが竣工後になるので、その間の資金調達も課題になっている。

総事業予定費 4000万円

補助金 3000万円（復興基金より）

残りは、地域の市民で調達する。

竣工は2004年の1月17日（地震発生日）を予定している。